困った行動の捉え方

発達障がいの基本

発達特性と発達障がい

通常クラスにも支援が必要な子どもが１割いると言われる。
重要なのは診断名ではなく、どんな発達特性があるかを理解すること。
発達特性を知ることで気になる行動の原因が見えてきて
その子どもに合わせた支援法を考えることができます。
「発達特性＝障がい」ではありません。

自閉症スペクトラム

社会性・コミュニケーションが年齢相応に育ちにくく
限定された興味やこだわりがある

＊孤立型・・一人でいるのを好む。
人と関わるという事がよく分からず
人を道具のように扱うことも

＊受動型・・人に関われるのは嫌がらないが
本人のストレスに注意が必要

＊積極型・・人と積極的に関わろうとするが
関わり方が一方的

＊四角四面型・・真面目でルールに厳格、融通が
きかない

■言葉の発達に遅れがある
■空気が読めない
■他人の気持ちがわからない
■自分のルールを押しつける
■物やルールのこだわりが強い
■会話がちぐはぐになる
■興味の偏りが激しい

特性例（自閉症・自閉症スペクトラム症など）

注意欠如多動性障害（ADHD）

１２歳以前から年齢・発達に不釣り合いな不注意、多動、衝動性が複数の場所で一貫して見られます。

＊不注意・・注意の配分がうまくいかず、
忘れ物・なくし物が多い、すぐ注意がそれる
日課が定着しないなど

＊多動・・じっと座っていられない、座っていても
手足がそわそわ動く、喋りすぎるなど

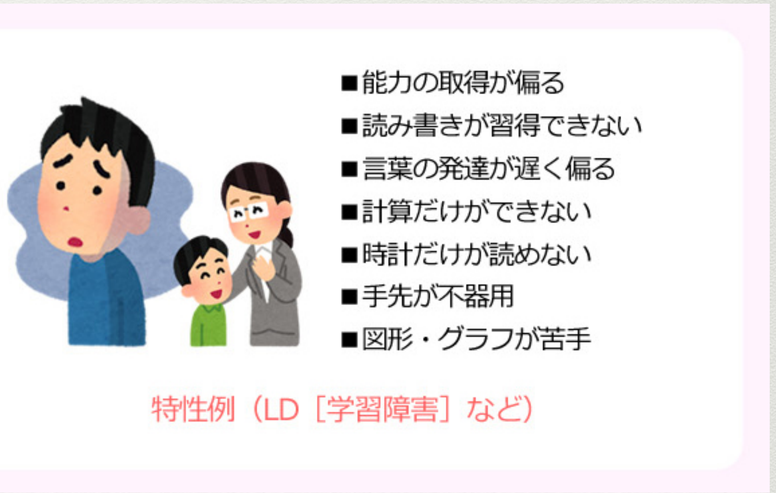
＊衝動性・・順番を待てない、質問が終わる前に
答え始めてしまうなど

学習障がい（LD）

＊聞く、読む、書く、計算する、推論するなど
特定の学習能力を習得することが困難

＊小学校入学以降になってから気づくことが多い

＊能力が高い部分もある為、できないのは本人の
努力不足と思われ、つらい思いをすることが多い



発達性協調運動障がい

＊体の機能に障害がないにも関わらず、体の部分を
協調して動かすことが難しく、うまく運動ができない。

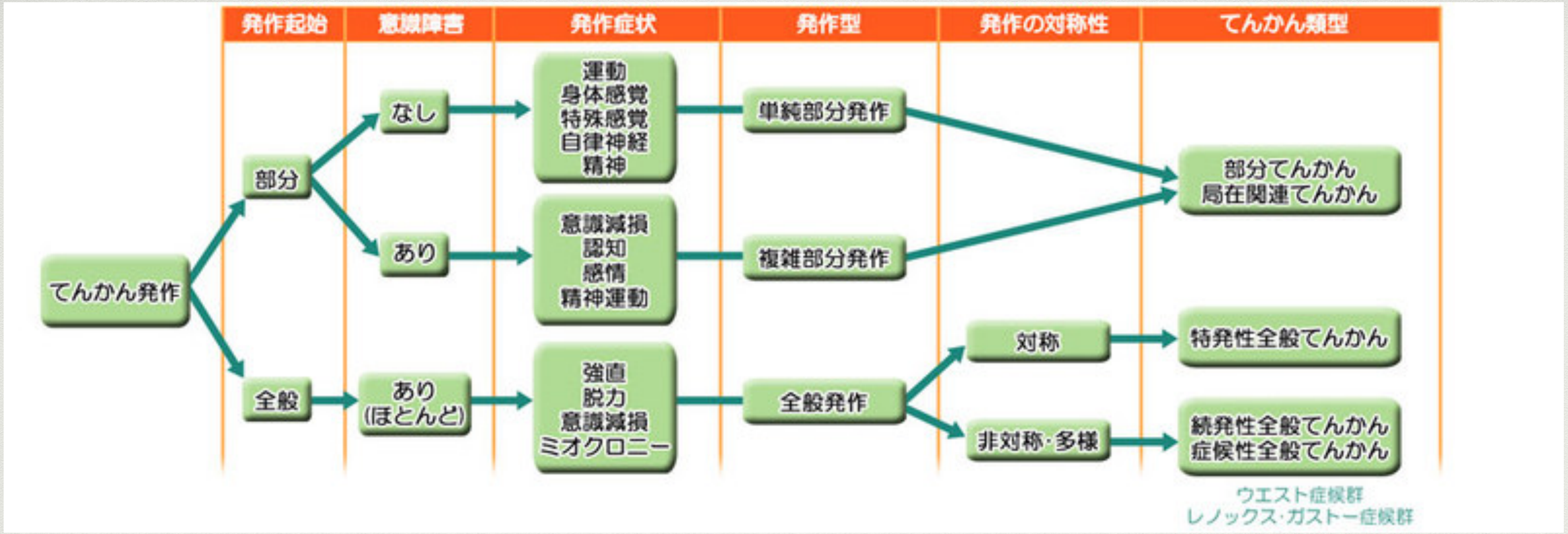
＊・手先の運動（ハサミを使ったり、ボタンを留める）
　・全身運動（走ったり、跳んだり）
　・組み合わせ運動（スキップ、縄跳び、楽器の演奏など）
のどれがうまくいかないかによってタイプが分けられる。

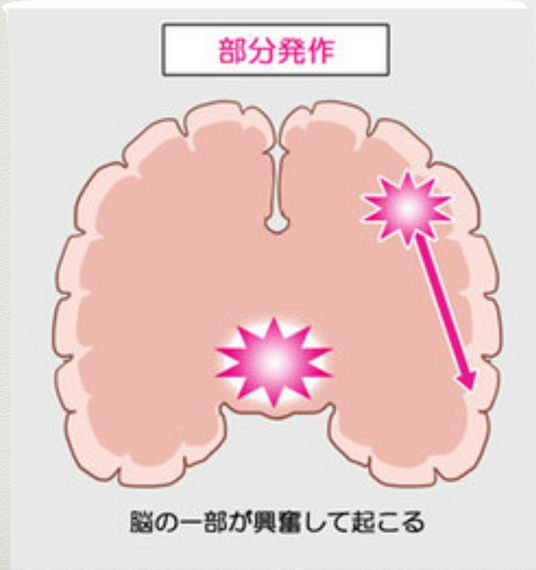
認知とは

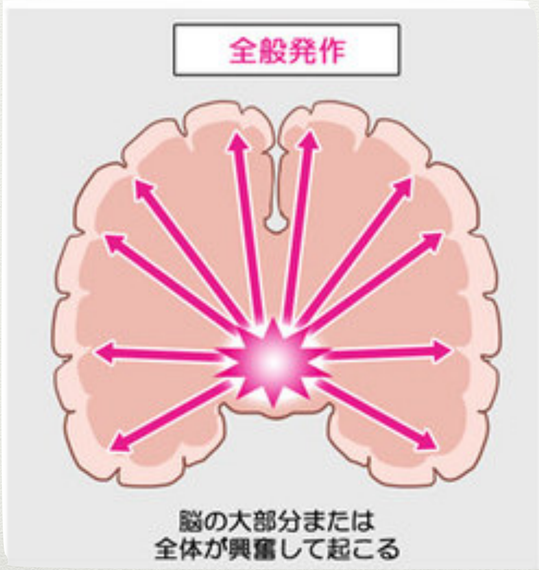
環境から情報を受け取り、脳で処理して行動に移す過程
その働きとして「感覚」「記憶」「思考」の３つがあります。

Ex. 保育者：「ハサミとのりを持ってきて」
子ども：「耳でその言葉を聞き取り」（感覚）
「ハサミとのりという２つの物を覚え」（記憶）持ってくるという行動

工作が始まり、切る場所を間違った場合
子ども：「間違えたけど大丈夫。先生に言えばもう一枚紙をくれるから」と考え
「先生、紙ちょうだい」と伝えます。
この時、（思考）と以前の経験を思い出すという（記憶）を使っています。

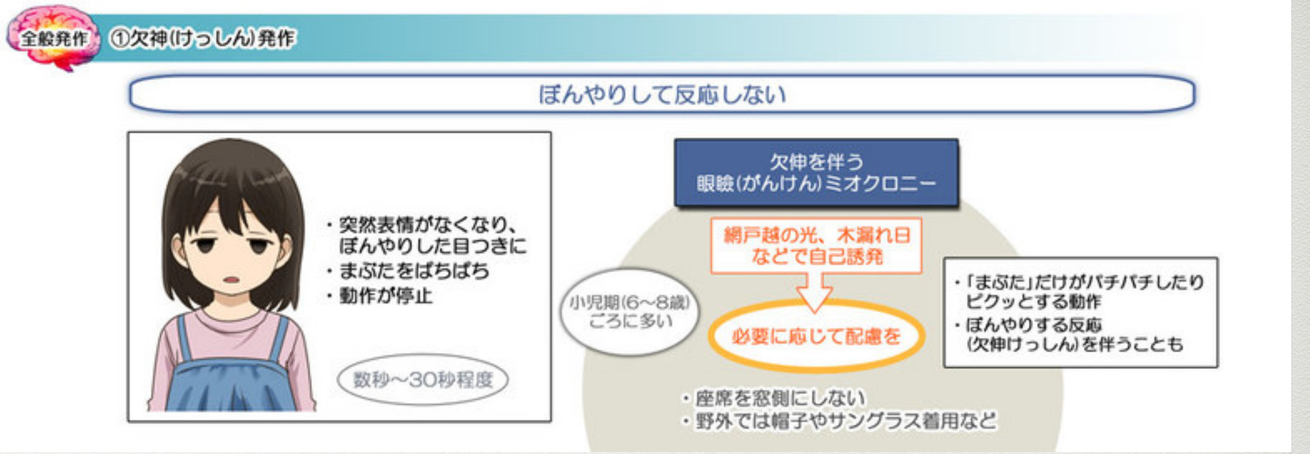






てんかんの原因

脳の中で微量に流れる電流が異常に流れることで
体の制御ができなくなる状態。
３歳以下が一番多く、１８歳未満の思春期に
多くみられる



てんかんの対処法

・痙攣中に周囲にあるもので怪我をしないように危険物を取り除く。
・呼吸しやすいように衣服を緩める。
・痙攣中に名前を呼んだり、揺さぶったりせず様子を見る。
（大抵は１分～数分で発作がおさまり、１０～２０分後には意識が回復する）

・口の中に指や物を入れないようにする
・朦朧状態で動いてしまう時は危険のない様に軽く寄り添って保護する